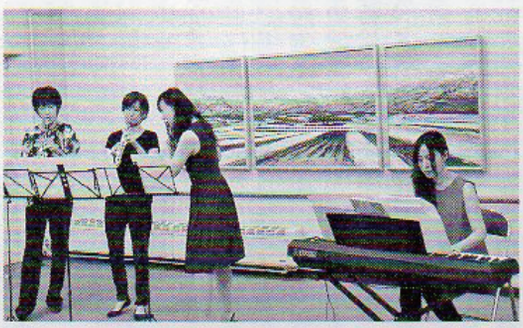
中心に14点を展示した。

雄大な自然風景を、明るく爽やかな風が流れるように描いた作品が目を引く。残雪を抱く山々を背景に、雪解けが進む田んぼを描いた「早春」は、真ん中に50号、その左右に30号を並べた3枚1組の作品。一つのキャンバスではなく、画面を三つに分けたことで、ワイド感が強調される効果が生み出されていた。残雪や深緑の山並み、晴れ渡る青空などきれいな色彩にも目を奪われるが、水の描写にも感心した。川、海、湖のほか、田んぼに溜まる雪解け水、水路の水…。「風のにおいを感じられる作品を描きたい」と言う福原さんだが、水のにおいも感じられる会場だった。



また、初日の25日には、クラリネットなどの管楽四重奏の演奏会も開かれた＝**写真、後ろは「早春」**＝。絵画、特に風景画に囲まれた中で、クラシックの演奏会が聴けるのは、時計台ギャラリーならではだろう。

◇八重樫眞一展（7月25～30日、B室）

時計台ギャラリーでは2004年から4年ごとに個展を開いてきた**八重樫眞一さん**。同ギャラリーで4回目となる個展には小品を含め、24点を出品した。

「記憶」を一つのテーマとする八重樫さんの作品は、どこかで見たことがあり、それでいて幻想的な風景が描かれる。昨年の道展に出品した「カシオペアの旅」も、少し暗めの色彩に、観覧車や回転木馬、亀の甲羅など夢の世界のような不思議な光景が広がる。その背に、新作の「夏の叢」が展示してあったが、「カシオペアの旅」の裏焼きのような構図。新作なのでまだ制作途中というが、完成した際には2点並べて展示してほしい。

◇浜口秀樹個展（7月25～30日、C室）

道展の工芸部門会員の**浜口秀樹さん**は、木材を素材として、カシュー漆を塗り重ねる作品を手掛けている。今回は平面、立体の作品計21点を展示。オウム貝や化石、キリンやカエルなどモチーフにした絵画的作品から、柔らかな曲線が特徴的な立体作品まで、伝統的な表現を持ちつつ、前衛的な要素を取り込んでいる。化石は卵の殻を使っているといい、本漆とはひと味違った魅力がある作品群だ。美術品を見る際、自宅に飾ることを思いながら鑑賞することがあるのだが、浜口さんの作品は、具体的に「部屋の中のここに置きたい」と思わせる、暮らしに溶け込むようなものが多いと感じた。

◇丸山恭子彫刻作品展（7月25～30日、D室）

3階では、道教育大札幌校特美を同時期に卒業した女性4人が声を掛け合って、各部屋で個展を開催した。

道展彫刻部門会員の**丸山恭子さん**は、FRPの作品6点を並べた。腕を組み、しっかりと地に足をつけた裸婦像、元気いっぱいに両手を広げる子どもの作品。いずれも力強さと人物の生命力が感じられた。

◇秋山知子彫刻展（7月25～30日、E室）

秋山知子さんも道展彫刻部門の会員。石こうやFRPの新作13点を展示した。頭像の首がない作品「どんぐり」シリーズ＝**写真**＝、壁に張り付くような人

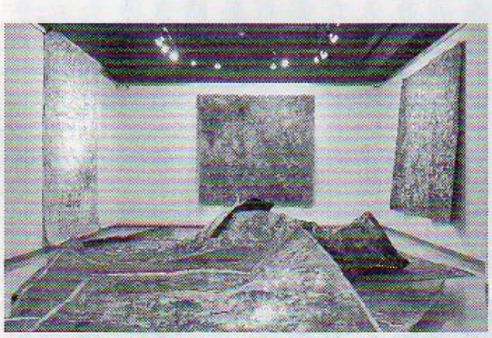
「かべのひと」シリーズなど独自の造形にチャレンジする作品に好感が持てた。

◇泉山桂子個展（7月25～30日、F室）

泉山桂子さんは以前、金工作家協会に在籍。1990年から劇団「人形芝居プロジェクト☆ライオン」の美術担当となり、人形作りを手掛けている。これまで手掛けた7話の人形劇の作品と金属作品7点を展示した。

劇の中で使われる人形だが、ギャラリーの展示室に並べられると、一つの美術品として鑑賞するにふさわしいものばかり。この人形たちが動く姿を見たいと思わせる。

前述の絵画と演奏会の例のように、ジャンルの違う芸術（文学なども含め）を取り合わせたり、融合させる試みは、これまでもあったのだろうが、もっと盛んになって良いと思う。

◇北口さつき展（7月25～30日、G室）

G室に入った瞬間、驚いた。**北口さつきさん**といえば日本画家であり、当然、壁には日本画が掛けられていると思ったからだ。予想に反して、室内には、黄色や赤、青など乱雑に描かれた抽象画のような支持体（和紙）が、壁に掛けられたり、床に山積みになっていたりしていた＝**写真**＝。これまでの作品の表面を剥がし、その上にアクリルガッシュなどで上書きしたといい、厚みの増した鳥の子紙や麻紙は、まるでパッチワークの絨毯のようになっていた。作品を惜しげもなく塗りつぶした度胸に驚く。北口さんは「断捨離」と冗談めくが、個展を開いてきた時計台ギャラリーが閉廊することから、決意したとも言う。一室を利用したインスタレーションにも見え、新たな表現に挑戦する意欲を感じ取れた。